





特 18  
號 1833  
卷 48



繪本古図記に篇卷三十二

目録

隴川一蓋會小回功臣話

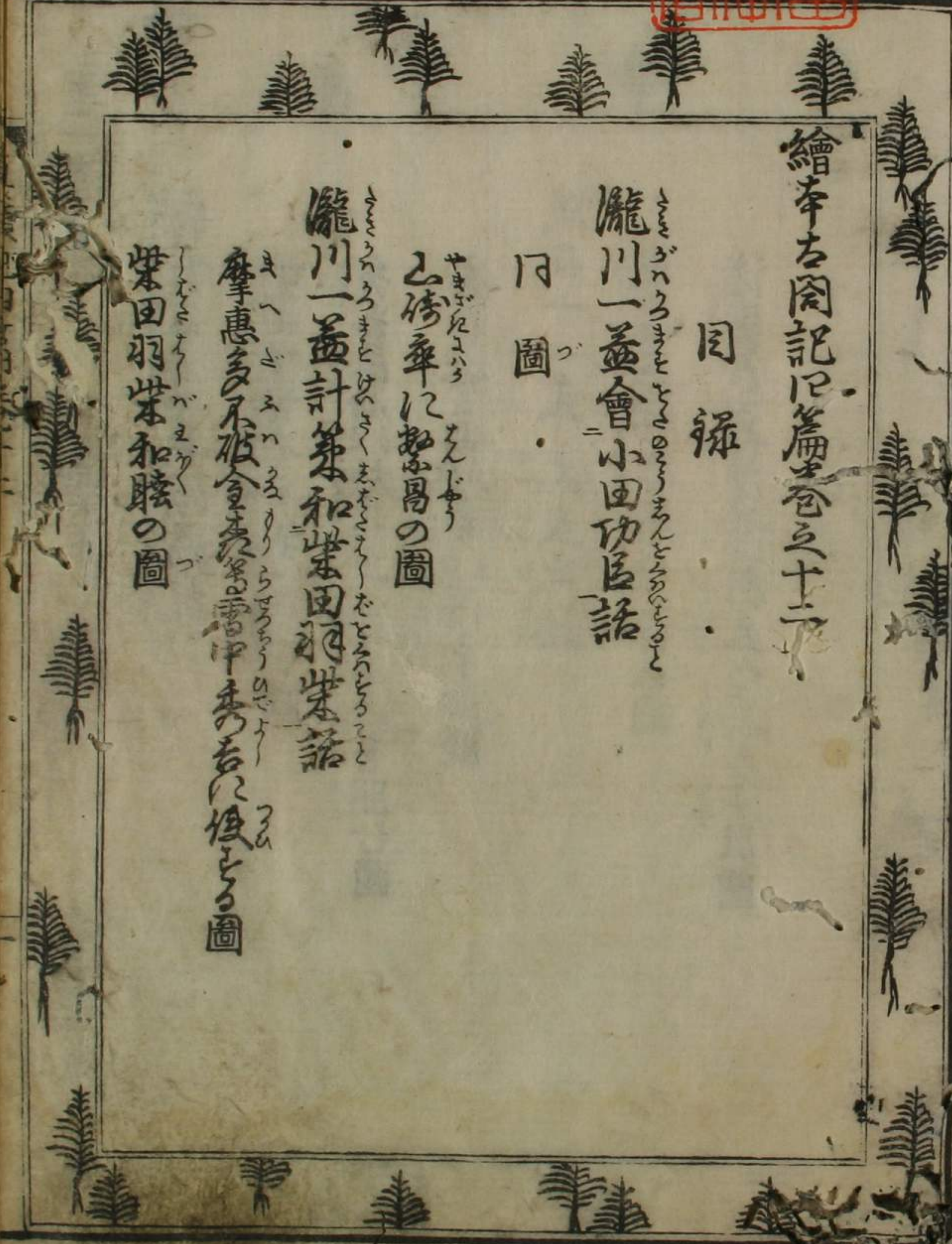
日圖

乙修率に整易の圖

隴川一蓋計策和紫回羽紫話

摩惠多不破金太夫の雷申其の舌に後とる圖

紫回羽紫和眩の圖





秀吉美濃長湊城詰

紫田修守秀吉の陣圖

秀吉民衆に放火して岐阜城を囲む圖

秀吉安芸初君に渴らむ圖

天正十一年元旦之話

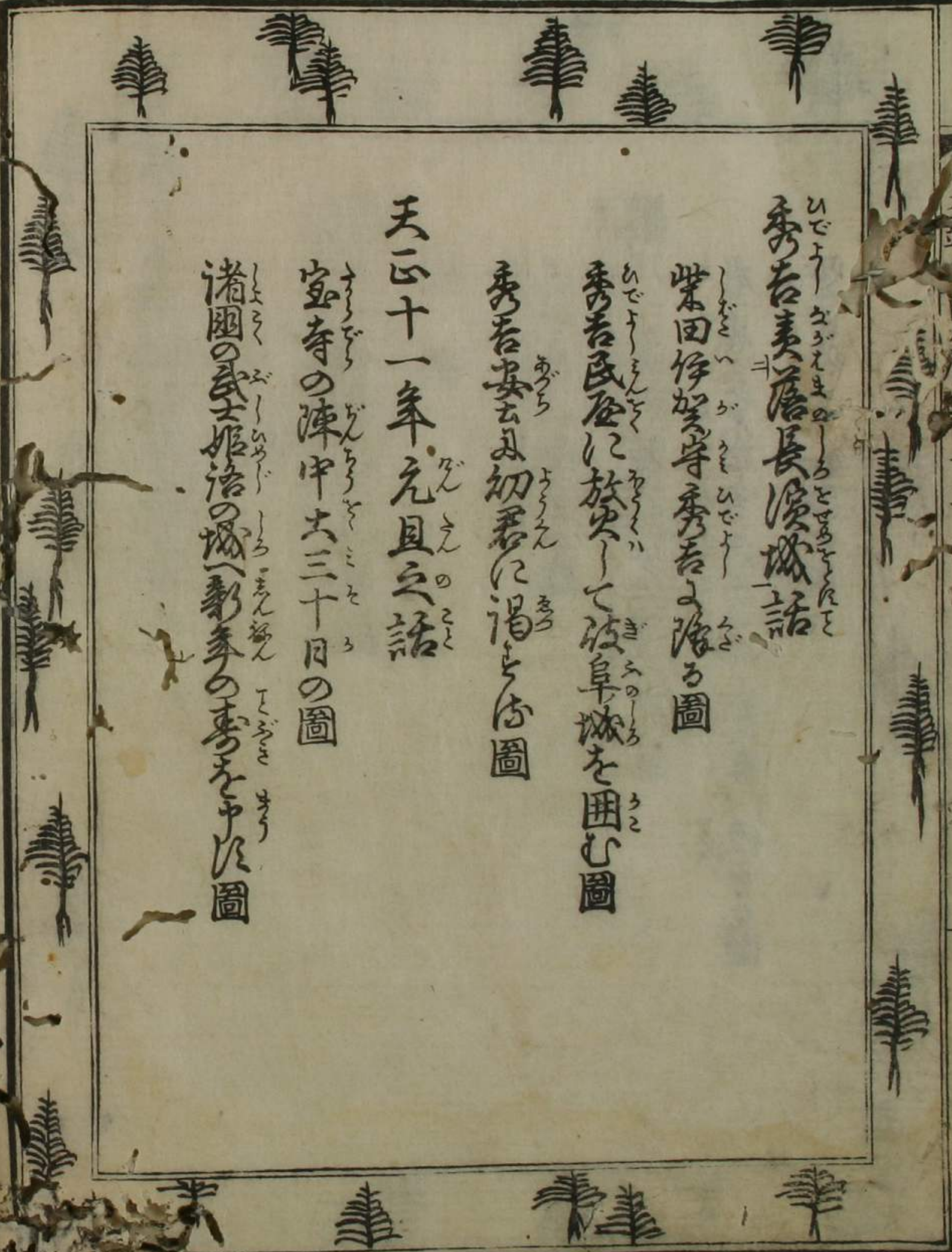
宝寺の陣中六三十日の圖

諸國の武士姫治の城(彰泰の秀吉を中)の圖

繪本古談記に滿卷之十二

隴川一益會小田切臣

隴川龍造お監一益小田家の大身といひ神戸侍後信者御の買はしむ  
 柴田勝家が妹婿といひ世の月いも輝くは元来武勇雄論の者之け  
 を羽柴が下用はるるに小田切臣は今度信長を不慮の死に絶り盡  
 せしむるに秀吉を三法師を守り天下の権柄を失ふと極むるの悪業  
 回が遠くはつ小田切臣して秀吉を多し賀若信者御を天下の武將と  
 政道を心の保らせんと日夜謀計をとりしるが今小田家の旧臣其外  
 のお土着の者がい修の戦功は服従一味と云き者多うるに輝くを  
 如難く信長を退福の後京都の旗本は母い小田家新右の臣下と  
 く拓き集めしはつ其心を試み刀先と云きは依て其拓き集む

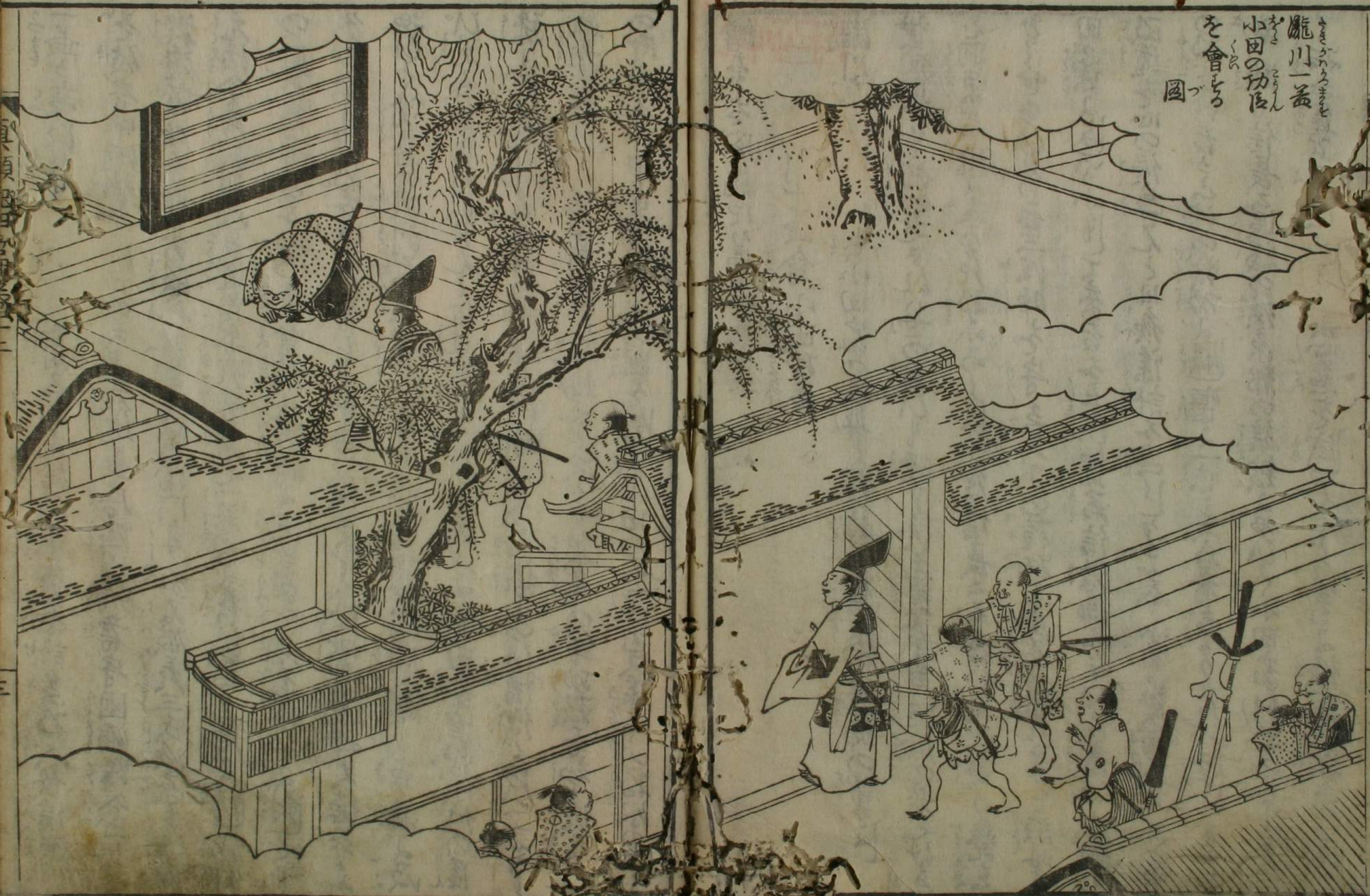


貞徳御成吉思汗卷十二

十二



龍川一翁  
小田の功長  
を會せり  
圖

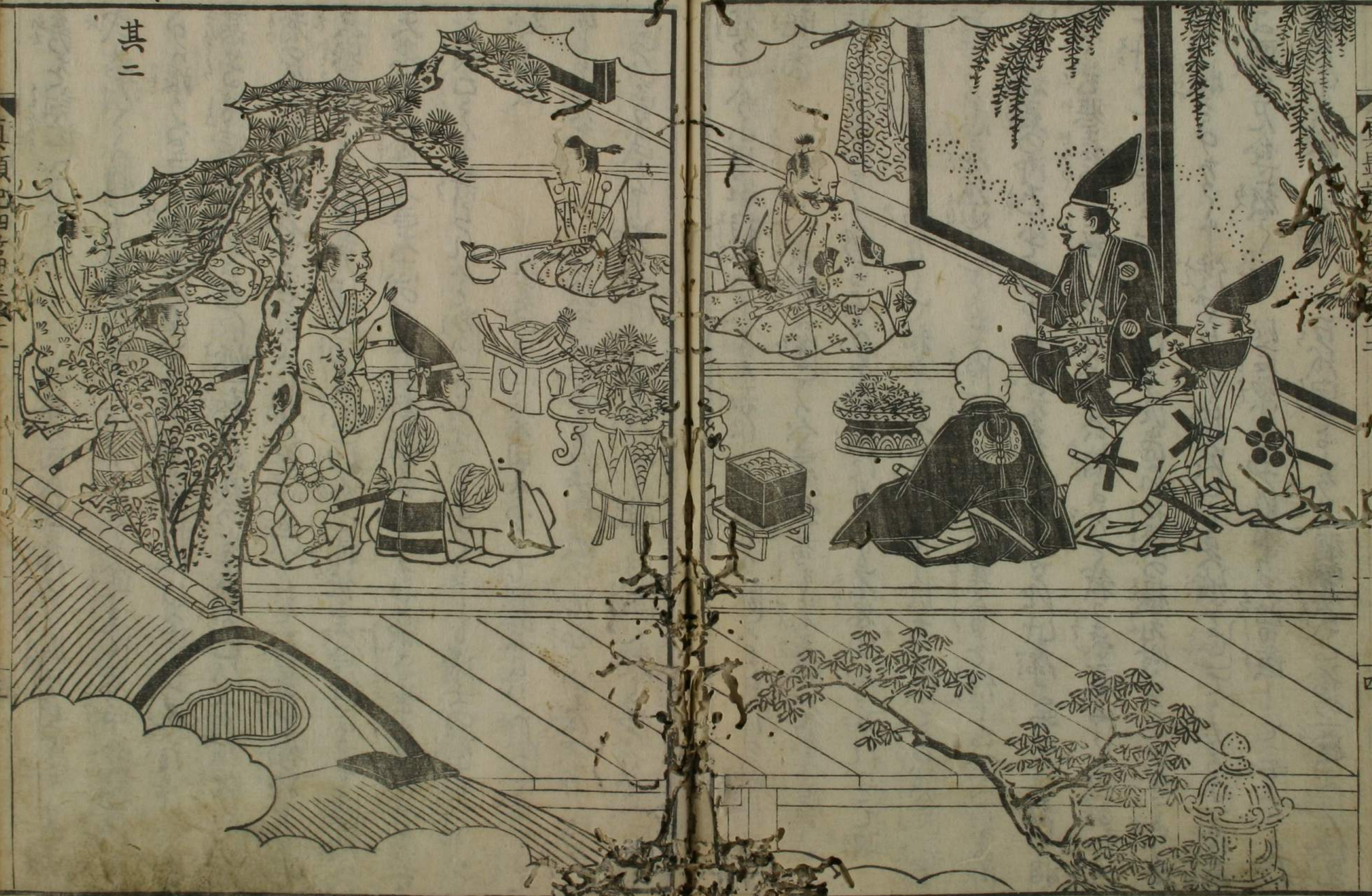








其二



真辨居士傳卷十二

四



秀を討てば大功と称せし柴田氏遠慮の瀧川氏さても其い雷  
 武はあいつの羽柴氏も考へざる物とてさても途遠くして吊合戦は儀  
 りの浪らざる念とてさてもさても柴田瀧川をばさる不肖といへども  
 某等結信長との怨怒に跡叛居然敵の先勇がこひ方なほびざれ  
 者のひきやまをばさると思ふは勝家の心危いんぞ秀吉を侮れとさ  
 只密に怒りい秀吉の功は原知君を補佐とさき侍よりしては終  
 天中承徳とさき大志のこてい原勝家海とさきと歎きまよとせて秀吉  
 を討てさんと討らしかと原知君の素くやも諸士の不取討が  
 おこぼしくいども其美の忠心に柴田よあつて羽柴よいこしはとて是  
 かと不取討三氏次とてさき後即後の仇をばさる柴田氏を  
 とつて勇武とて先勇沖在世のわらう殊に其美の忠心に柴田よあつて

藩侯として瀧川氏を討てて大志のこてい原勝家海とさきと歎きまよとせて秀吉  
 るまの勝家とてさき大志のこてい原勝家海とさきと歎きまよとせて秀吉  
 中はけいともさき私辱を蒙り初めにして怒りさる希皇天下の間  
 よこしめさきやまの勝家が怒りい程はて秀吉とてさき後即後の仇をばさる柴田氏を  
 又即八進と出さるやさるいあその新以理よこそい何の各別一は日焼香の  
 節秀吉が妙法とて先勇は勝家とて怒りさる希皇天下の間  
 お集り先勇沖勝家の討はさるい程はて秀吉とてさき後即後の仇をばさる柴田氏を  
 古老大屋の柴田瀧川を悪言初若の補佐と稱し角第一番の焼香せ  
 とさる諸國我勢ひを示し小田家の武士を屈服せしめん謀計は  
 して何をや某が愚人をばさるを論せし柴田羽柴が和卒と好まら  
 小田家の忠と愚人と歎とる者の勝家には心して秀吉を討てば一



の備ねおないふい中と妻と勳やこれ龍川一益をそと制(素乃  
 不ねをる程とんきくはひ係素退くあ士の遺恨考案とあに又  
 秀吉の權さきまあに我いまご上落せ給て其(委)きり知(は)たさるも  
 法(剛)の燃(ゆ)ゆひと勝(れ)を登(の)りあ人もまぐ秀吉の(對)矢(放)るまは  
 ひと(受)りその各(別)目(前)刃(之)のり秀吉の(石)丸(は)長(溪)又(石)酒  
 真(の)席(と)迫(て)そと奪(を)さる(候)令(勝)家(小)田(お)に(お)ひて(功)老(の)回  
 戻(り)も(秀)吉(も)又(功)を(ま)く(先)君(より)上(場)ひ(る)地(方)に(は)我  
 我(を)勝(家)己(が)威(を)真(も)取(り)に(を)奪(ひ)し(る)人(も)秀(を)あ(わ)け  
 も(誰)も(是)と(憐)ら(ざ)らんや(一)派(日)大(德)寺(と)て(秀)吉(謀)計(を)な(く)柴(田  
 を(恥)め(り)法(剛)の(背)懐(を)頼(ひ)者(か)ら(ん)に(は)我(の)秀(吉)と(柳)送(根)は  
 とも(柴)田(が)内(縁)に(緊)と(ぬ)に(其)柴(田)の(意)を(あ)だ(ん)と(甲)以(て)

頼(を)も(恥)め(り)の(ち)う(ん)我(も)お(ひ)て(は)法(剛)の(意)を(あ)だ(ん)と(甲)以(て)
 ん(の)も(あ)と(希)い(ぬ)に(は)内(縁)の(柴)田(と)て(私)の(不)ね(を)な(て)何(ぞ)そ(ぬ)
 同(心)を(入)き(や)案(を)な(て)諸(ね)お(わ)き(音)の(ま)ま(と)取(り)ん(と)怨(見)お(計)ま
 一(番)表(裏)の(ぬ)河(の)増(お)計(ま)是(角)通(て)より(羽)柴(二)味(の)人(も)ま
 不(龍)川(中)宗(我)の(心)腹(を)揮(り)ん(計)略(と)又(く)推(察)し(ら)け(ま)い
 いや(龍)川(後)の(信)も(さ)る(ゆ)に(ゆ)も(先)原(合)衆(不)破(等)の(や)る(程)
 我(も)お(な)も(は)ま(に)そ(竹)人(傳)さ(る)あ(あ)の(ち)う(和)平(せ)ん(は)地(う)に(は)
 と(う)に(陸)ら(ぬ)河(つ)と(符)中(河)一(層)の(面)我(も)益(て)私(を)思(ひ)つ(ま)
 何(ぞ)ゆ(ら)し(勝)る(者)あ(ま)づ(に)彼(も)ひ(も)も(語)り(は)く(は)宣(し)く(罵
 とも(移)く(心)思(ふ)一(大)の(人)を(取)り(て)を(を)ま(ん)や(疾)も(つ)く(更(ぬ)き(は)





山崎 藤原の 園



山崎 藤原の 園



其後の夏いふ終り皆叛叛(ぞゆりたり)

隴川一畫計策和柴田羽柴

其翌十八日隴川を近お監一益柴田が旅宿に候き勝ぬに渡りて中  
中より秀吉上に媚下に端ひ内々諸おと因を繕ひ願ふ人心を得る  
此後我族叛小田家の諸士公拓き集り余はさぐり其心を操り  
るふお計多足角中河高山陸川舟舟を始し近國の武士悉く  
秀吉の心を委せ今に合戦始ふ忽ち秀吉が先鋒は遠く功を立  
て孫子孫の恩を得んと欲し我く一味秀吉に力を多しき者も只  
不破三系老治郎合秀吉即八磨悪多取尾門ホのこ其中心  
磨悪多の渠太法代の者より秀吉をいひ合の要あり當時近國の  
幕下の属する味方同心のこをいせり

よしが史急よ事を後(さ)味方兵少く合戦は難なり我  
一先本國は後(さ)よろしく隣國のおまを後(さ)味方の英氣と書  
いふ只一戦は後(さ)面冠者を討じうん何れは後(さ)謀を好  
んで後(さ)智者の欲するを急よ後(さ)急よ後(さ)國せんと思ひいへ  
よひやと見ぬるれい勝ぬえ素老功の武者をれい後(さ)や多る我りけ  
らら其計略(さ)工まは(さ)先本國(さ)退き都の内を秀吉が心の候よ  
勢を震しり渠が心嬌を候てそと討(さ)合く功を立(さ)きことを押ひ  
は(さ)下(さ)の判(さ)系(さ)心(さ)并(さ)合(さ)せり(さ)一(さ)画(さ)を(さ)使(さ)て(さ)送(さ)て(さ)や(さ)ら(さ)り  
近(さ)他(さ)今(さ)け(さ)り(さ)心(さ)付(さ)る(さ)い(さ)お(さ)小(さ)田(さ)家(さ)の(さ)孝(さ)秀(さ)吉(さ)を(さ)こ(さ)ん(さ)の(さ)密(さ)の(さ)中(さ)  
ま(さ)り(さ)我(さ)つ(さ)く(さ)考(さ)る(さ)小(さ)田(さ)雪(さ)清(さ)く(さ)て(さ)素(さ)奉(さ)三(さ)月(さ)と(さ)軍(さ)と(さ)出(さ)る(さ)の  
雖(さ)今(さ)仍(さ)て(さ)秀(さ)吉(さ)と(さ)和(さ)睦(さ)を(さ)よ(さ)孫(さ)渠(さ)心(さ)を(さ)急(さ)し(さ)り(さ)内(さ)々(さ)本(さ)國(さ)小(さ)田(さ)

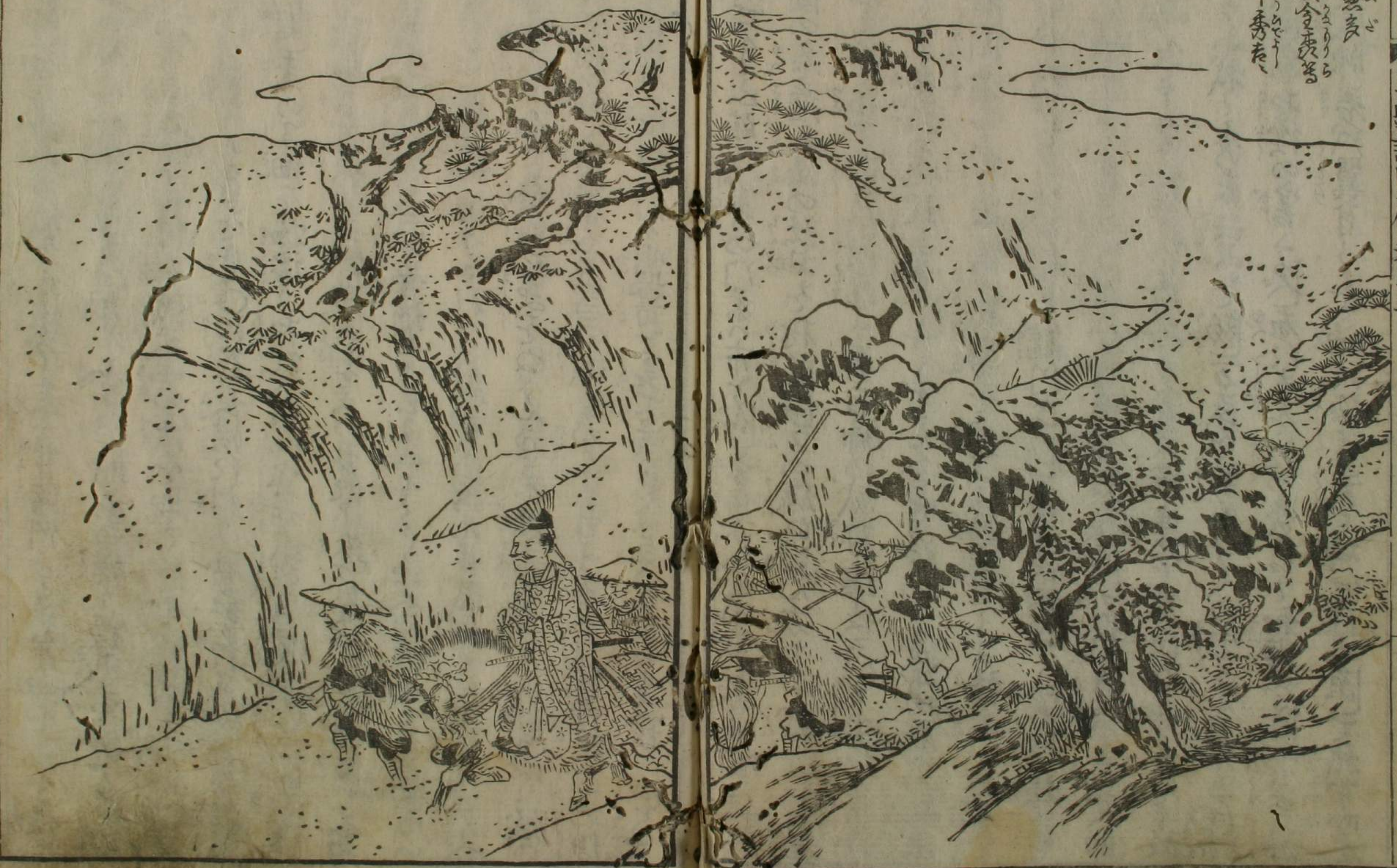


のまを清し雪の清るを待つに討て登人の勝どつるのま  
うは足下國のゆめは後後者をして和平を乞ふ勝の計兼と  
終るとは勝家大に恨び計きつめて妙我漢でまは清んとまは清計  
中合せ率の油國の月を以て十九日應惠ま合率不破等をも具  
一誠意をこゆる多う龍川一帯も日共軍勢を惣一國東に  
て其餘の諸士を小名づきも秀吉のいまを告げゆの國へ  
實の如く秀吉三法師秀信を去る居まつせ長谷川丹波守  
若田玄以法印を人をして初君の補佐と信雄御の清洲城信孝御の  
波集城の後初君の後見と定め其身の燃かた秀吉守り要字を  
構へ系部及び近國の政を司り終り秀吉御の威風凜凜として海  
内を驚き退日勢は強きなり諸國の大名風々の諸士秀吉の真

は馬とんとは修室身の内系り市と信を止の殺者或は花柳の  
其國の名産と海の珍物を採遣は辺の賑ひらん方ちく我一は熱切  
勵んとして勇とつるに討院の勇若御の威勢信長はも方り  
とやくも武の兆現と勇しくぞ見んを強ひつる世田勝家派若  
は諸國者をめて秀吉が形勢を窺ふは皆威日くは強きなり  
勝むの大方なりは清れは龍川がしどく小國よく雪降後軍と  
出せん候もかく先の儀は清の應惠多はた清門不破三合率又即  
はを以てやつるに信長を御するはまは依て豊後清ひいまごまご改  
めらふ我々秀吉兵を勤むる民を若んり人の嘲りを免れ  
中小田家お徳の言ふは志を改め秀吉と和睦を以てお若知  
若三法師若以翼をくんと終り汝等と辭せはと原て我中心を



摩多美  
名破令美  
雪中秀  
俊とるを





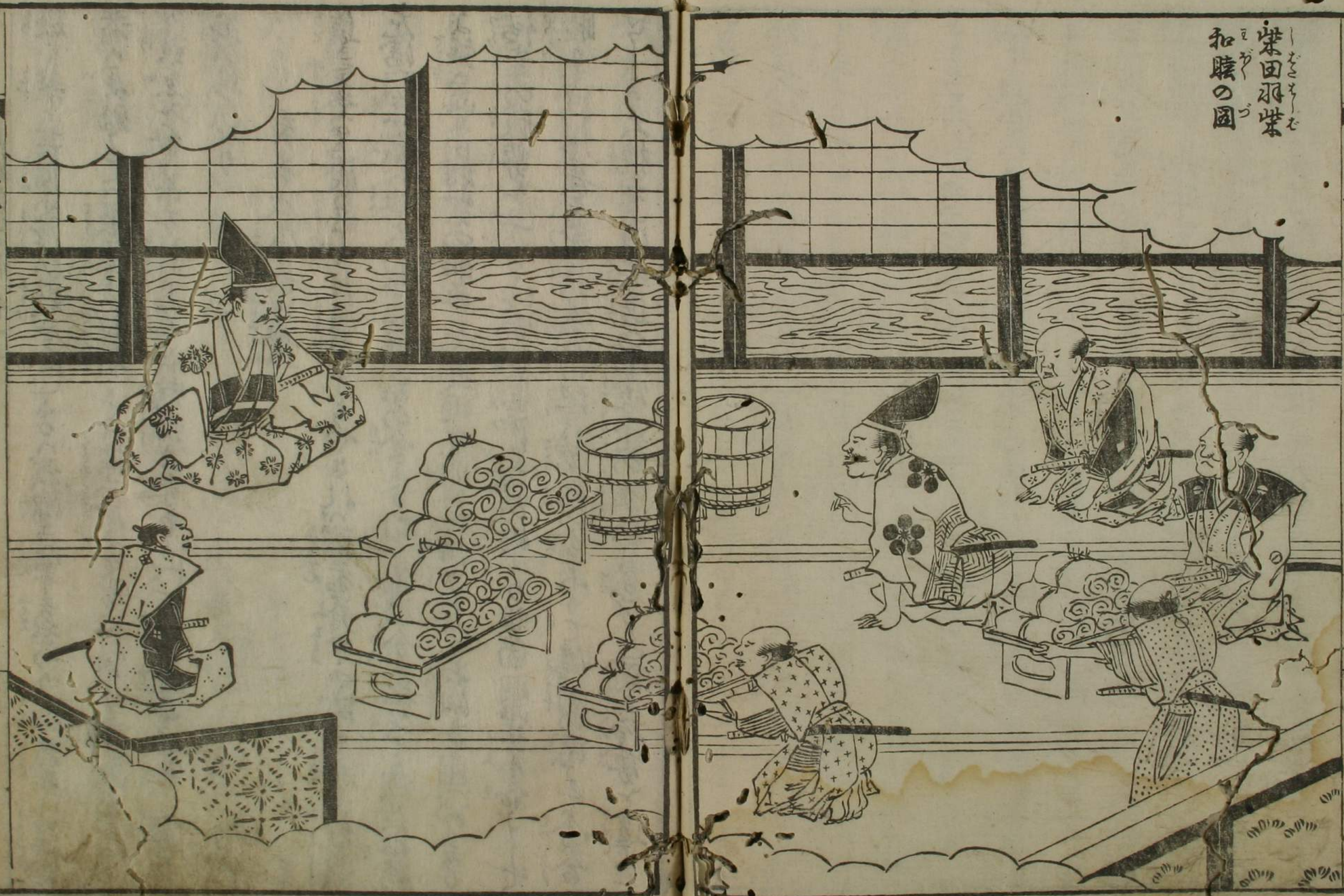
秀吉の告げ初平の依を結ぐ来が奮躍何のり是又如んと是又依  
 摩惠多不破合本林等け首を合兼勝家の物就前陣に把持  
 結二桶をえおせ十月下旬城前山の庄を如く凍雪成踏し山風と凌ぎ  
 却とじて登りたる目を奪ひに長谷川に到り勝家が如く守勝  
 又對面来の子細を物語りお供よる信守小坂き富田九近お監り  
 附く勝家が口と及び是心の守志を秀吉にや進兵秀吉を以て大  
 疾び是小田長之の基万奪何と是又如んとく口人の後者又對面て  
 福の是と響應且中えんる勝家の小田元信我何を其河小背くへ  
 き今和平とほて辰園の事をとらんゆえ来来が希不之物り附り紙の  
 記注文を以て西家是心の徴と成んと是又依て三復其紙の如く  
 若を紙を渡し申向の附書と立て秀吉よる秀吉も又折紙成と

て是と三復は渡りし復勝も又依び万葉を唱へし信と是て新  
 却又入信長との所業の来附原源も又折紙信成して經と秋渡  
 しまより怪が常い長谷川ゆり三復り紙を以て急ぎける霜月下旬山  
 庄の波着しれ勝家が如く是び三人の勞を附け度とて秀吉を欺き得  
 たりと表して是とゆふる秀吉の宣守よる紫園が後者を送りくし  
 秀吉を敵とて笑ひ給ふ勝家小田本村隼人等御前にも其笑ひた  
 き人謂を同く秀吉を言々宣ひたるは度勝家が和親のの留めて協  
 定の條に勝家の烟で軍勢と備長一率よ責登んと思ふも小田の保  
 るは理と出陣せんゆ叶に難い宣を以つて和平とを以我を以て  
 明幸雪消人馬の往來自在なる御意は絶て我を責ん勝家計  
 略之我既の是と知るとゆふる彼が條計は附て味方の子細と知えんと



柴田羽柴  
和賤の國

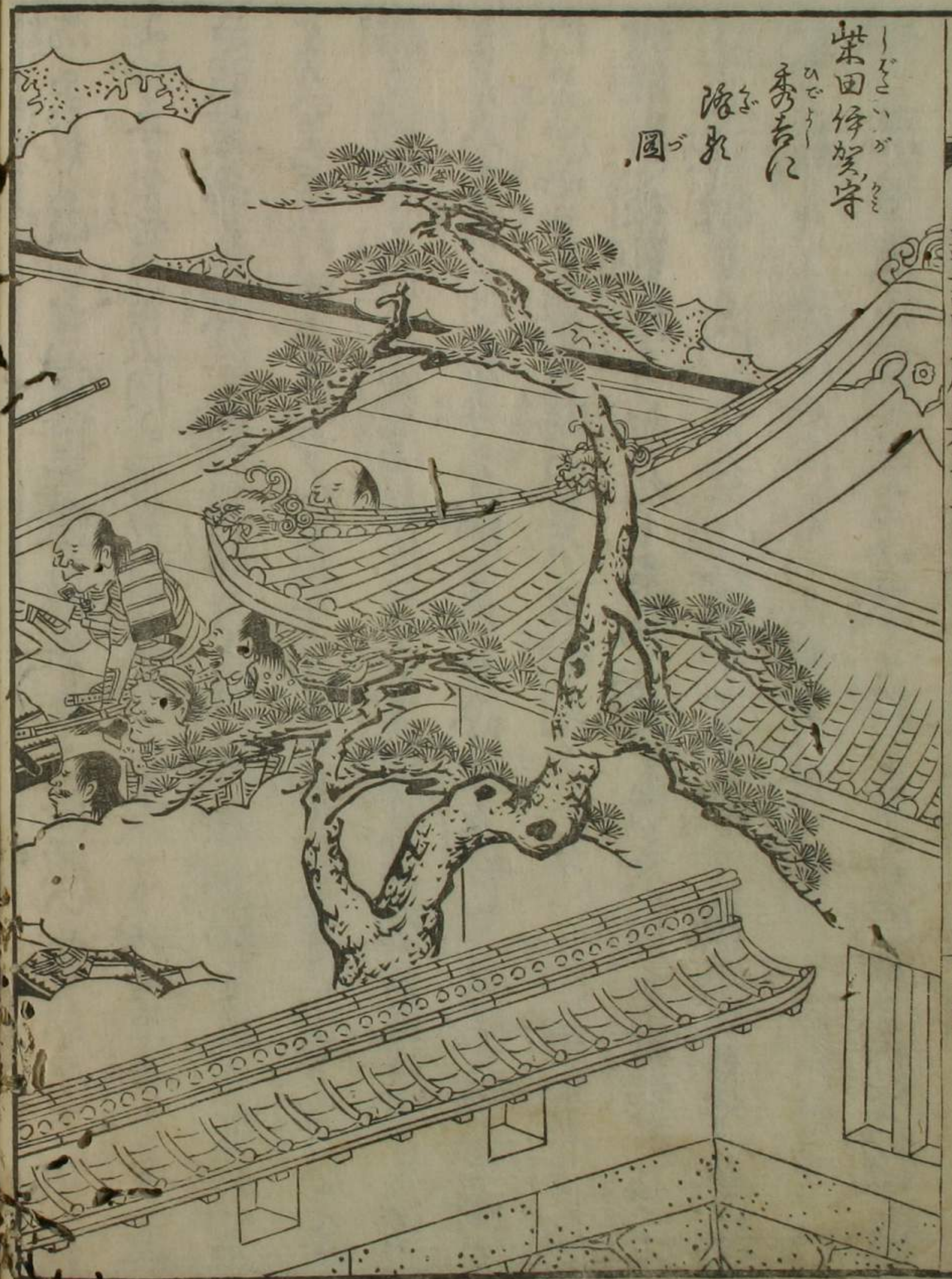
真言四篇卷三











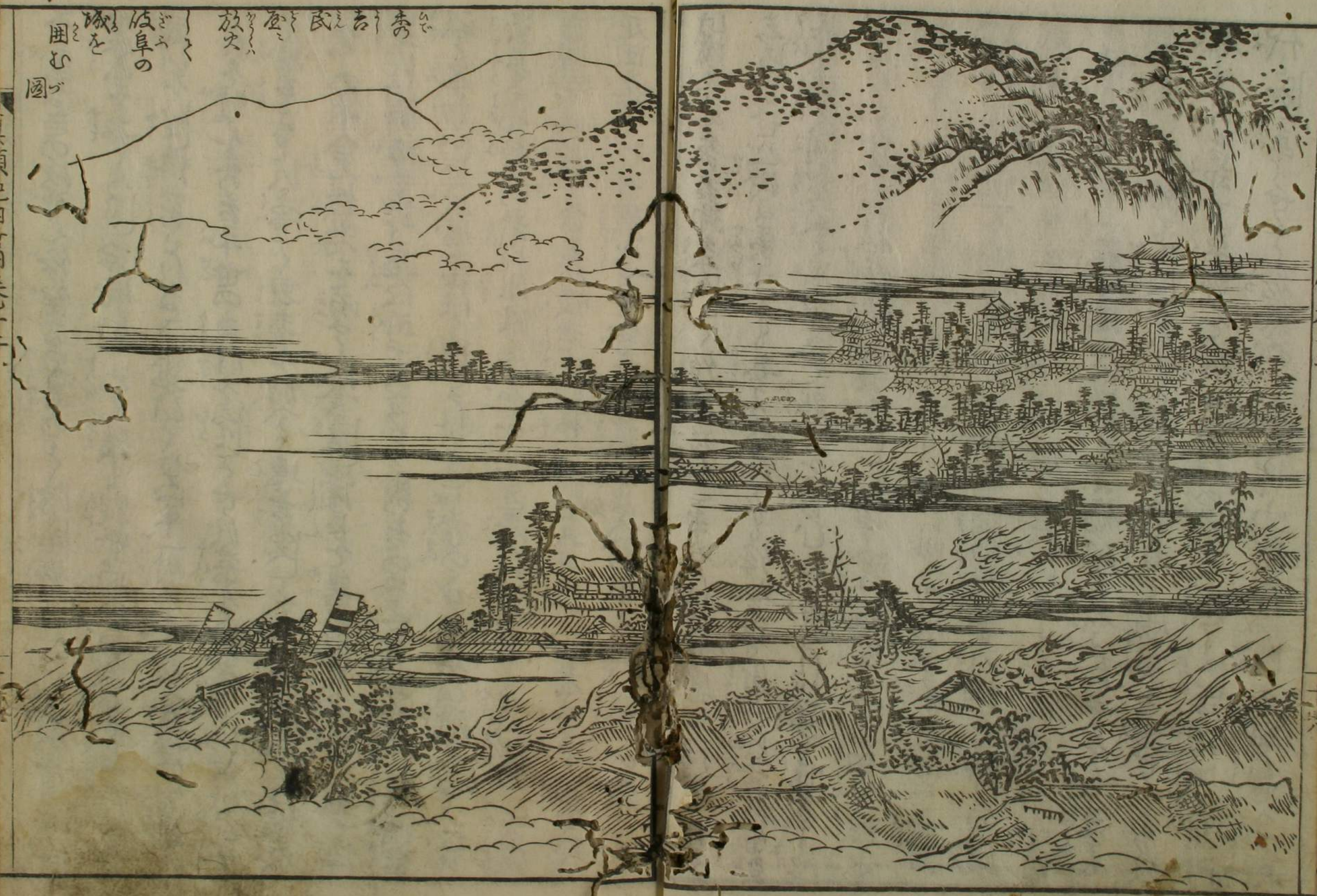
しんごい  
柴田修賢守  
ひびき  
秀吉に  
臨み  
國







畠  
 城を  
 倭  
 阜の  
 放  
 屋  
 民  
 吉  
 赤  
 畠  
 園



真  
 景  
 記  
 四  
 冊  
 卷  
 十  
 二

十  
 五



本意のきの波神の伴の忠告ありて路を絶つて三ヶ所を渡りて  
 世業を安くしむるに城ががら後にも世田の家名全にお後とは  
 疑ひをばし件容こころきおしり大軍一討に美討人馬城を悉く  
 こしを焼く者若平世の交情を捨てて其を使者にけりし事  
 を勝る中次委しく思意を加へ返言ありと云々安くおして徳永  
 本町のあ人先使者を厚く饗應諸臣を集め勝るが事に出で件  
 定にけ耐辱を穿痛に却てあつるが事若平のこころをばし依久回望  
 政と不和して又勝あり跡ましぬさかあのみよ思ひ殊よ若平が  
 義弟若常の若に絶つと心をばし居れ急ぎよはし路を絶つ  
 され返言の若の使者に扱はれ又日絶政の若も大程松山  
 足田近津谷城を治る事ありて集むるに又若平の討に急ぎの勢あり

七ヶ条を記ししに若平の使者に扱はれ又日絶政の若も大程松山  
 を治るに急ぎの勢ありて集むるに又若平の討に急ぎの勢あり  
 よ及びれいげといふ子義絶つて及ぶ若平路を絶つと急ぎ同然若平に又  
 母妻の若の急ぎ我居城九園ゆりて勝ありなるといふ我よと  
 せんと思ふ者の姓名のよふ息取けて明日折書を書けりてと巻  
 紙に諸士の名を記して物々ふそ終よ息取け若平路を絶つと勇む  
 者もあり又九園の母妻を持ちたる者も眼やて別と云りあつて其強動も人方  
 なるに若平の母を呼ぶるにいと急ぎりの者もありて其強動も人方  
 はし若平御の城中の老幼を人質にとり本村集人を城代とし是南  
 方計多し若平細河中河守山守の軍兵合せて又万騎信者を討んと  
 ては月廿七日同書を厥に送きて進發の其方一軍方より属せ



今般夜



いとうあつら  
秀吉妻云  
切着の  
溜る園

長門守の御前

十五



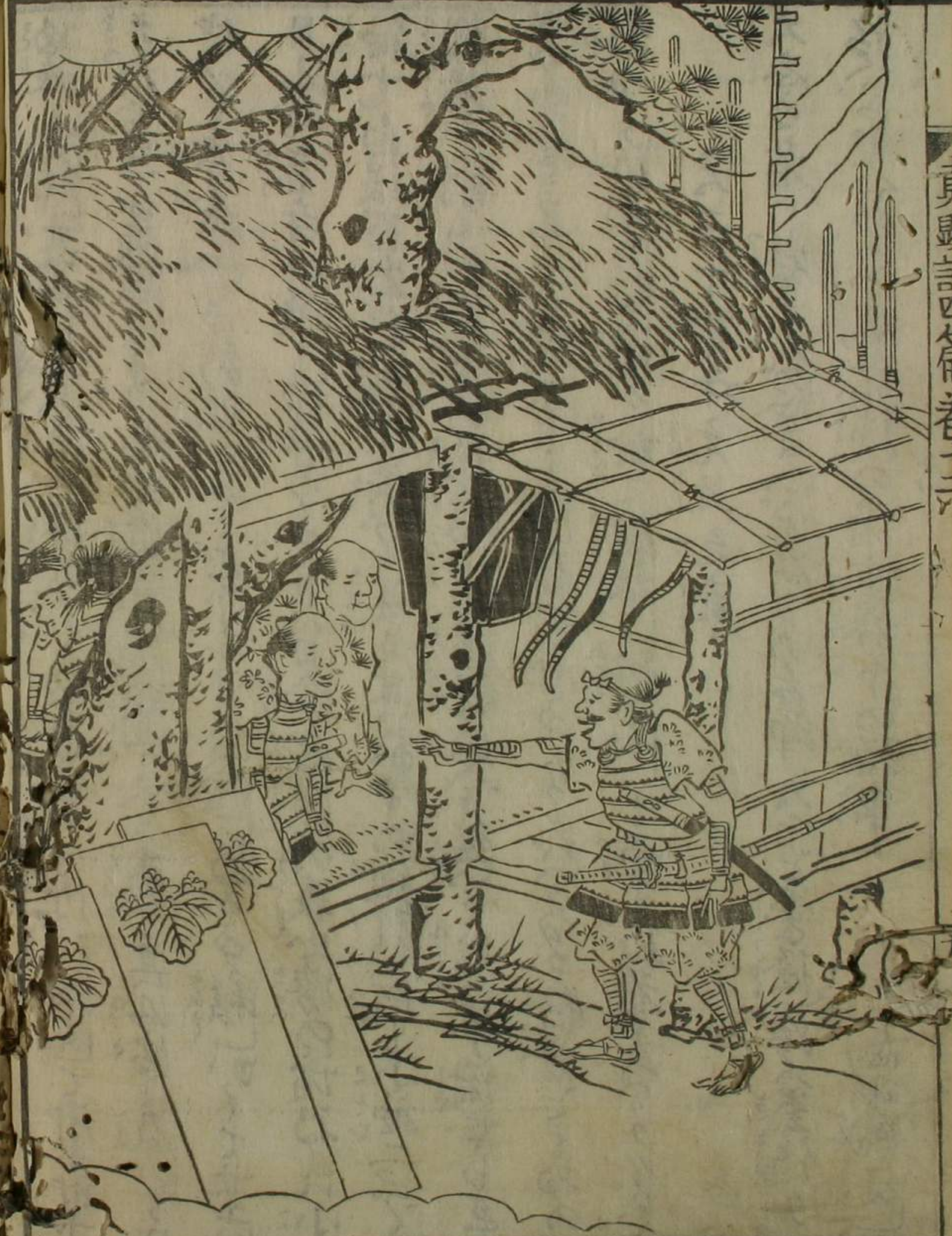
其者忽々美之げ甲を膝に踏きしりてと懐  
 を賜ひ終に濃及大垣の軍陣を居らざる濃國大方時方に橋  
 板押せしつ所を放火に波集の城を裸城に即討し系を  
 の煙一甚急之痛き故信者御心別は猛然にも國中の城を  
 郡を悉く心を懐く敵ははるより去りたがるる力なりけり  
 と和睦せん外はとて長秀が陣其城を信をたしるる不流石信長公  
 連してはくこれ痛はくならず秀吉に委細に連るる不ぞも又  
 其君の御しりてこれわれば押て美んゆもは難くて御老母と三法師の  
 秀君を人質にして安土の城に居り軍勢を悉く引濃及大垣  
 平均ては及長濃へ御しりて大垣の城を去まざる信長 鉄炮の玉茶  
 武器兵糧馬の飼ひ等も悉く去りて諸方の城を去りて  
 二月廿三日

油陣の及び其夜に安土の城に居り初若君の御しりて御しりて  
 其根を三つ両献しなり其外に外換の面も悉く其は法に及ひ  
 申く忠義に三つ法に及ひと下を去る感にぬるの難かくて廿六  
 日と信守寺の城は油陣ありて廿八日今を濃國表出勢の諸お小  
 神十白浪百枚持者十荷ぐ其其家中の組次一何も小神二つで  
 役者を副らぬ嚴冬の節に方の信にび入る難く其は中謝せらる  
 る不流石を感せざるんけ大おの御しりて御しりて御しりて御しりて  
 殺るるびわれば大功を御しりて感称に及ぶと勇まぬ者ぞとるる  
 天正十一年元旦之事

大志の者い勢て人の心は入るる秀吉御天下と豊極に及ぶ  
 其の家人の外換の諸士幕下の経年と久しき心は感服



宝寺の  
陣中  
又三十日  
の  
図



黄鐘言四篇卷五









新國の武士  
娘信の殿  
新年の  
夢を  
中流園

貞島言四倉卷三十一

卅五







江戸書林

西村宗七

大坂書林

海部屋勘兵衛  
柏原屋嘉兵衛  
塩屋忠兵衛  
播磨屋新兵衛  
勝尾屋六兵衛

寛政己未年秋刻成





